

## 古今伝受における『古今和歌集』の解釈

——『古今和歌集』二七七番の解釈をめぐる——

小 高 道 子

### 一 白菊と初霜

古今伝受をはじめとする中世歌学の継承者は、伝統を重んじ、師説を継承することを重視していた。そのため歌学者間の解釈の相違を無視して「伝統歌学」と一括され、国学者などに批判されてきた。しかしながら、例えば契沖と賀茂真淵の注釈が大きく異なることがあるように、二条流とされる歌学者の注釈書の内容も相違することがある。

師説を継承していることは間違いないものの、継承した師説の中から自分の判断で取捨選択をして、弟子に伝えていったのである。こうした古注間の相違を、『古今和歌集』の二七七番の和歌「心あてにをらばや折らむはつしものおさまとはせる白菊の花」(1) について検証してみたい。

この和歌は『百人一首』にも採られ、広く知られている。この和歌は、例えば日本古典文学全集は「どつしても折ろう」というのなら、当

て推量で折る以外にないだろうよ。初霜が一面に白く置いて、折ろうとする私をうろたえさせる白菊だよ」と口語訳をしている。そして「置きまとはせる」の注に「初霜が置いて花と区別をなくし、折る人を当惑させる」とある。この和歌は、初霜がおりて白菊と紛らわしくなり、折ろうとする人が折るに折れない状態を詠んだ和歌と解釈されることが多い(2)。

### 二 古今伝受と講釈聞書

#### 1 東常縁から宗祇へ

古今伝受という三木三鳥に代表される切紙が名高いが、その前提に和歌・歌道の師弟関係があり、切紙を相伝する前に『古今和歌集』の講釈が行なわれた。古今伝受が『古今和歌集』の解釈の伝受である以上、その基本となるのは講釈であり、古今伝受の象徴とされる切紙

も、講釈終了後はじめて許されるものであった。それ故、講釈と聞書との関係についての研究は古今伝受の研究にとつて不可欠のものと思われる。更に、古今伝受において行なわれた『古今和歌集』の講釈は、最も規範となる『古今和歌集』の解釈であったから、講釈において継承された内容こそが、当時もつとも尊崇された『古今和歌集』の解釈であった。そこで、まず古今伝受の聞書を一瞥してみたい。古今伝受資料がまとまって伝わる東常縁から宗祇への古今伝受において行なわれた講釈の聞書が『両度聞書』である。『両度聞書』（引用は『中世古今集注釈書解題』による）は該当歌について次のごとく記す。

「おらばやおらん」は、かさね詞也。たゞあらましこと也。菊をも霜をも愛たる心也。うづみはてたる霜にはあらねど景氣をいはんとてかようにしたてたる也。

現代の注釈書では、折ろつとする作者の心の動きが注目されているが、『両度聞書』では、「おらばやおらん」は「かさね詞」であり、「たゞあらましこと也」とする。この部分はかさね詞すなわち表現上の技巧であり、白菊を折る事は「あらましこと」すなわち予定されている事であり、和歌の主題は「菊をも霜をも愛たる心」であるという。うづみはてたる霜にはあらねど景氣をいはんとてかようにしたてたる也」と初霜について記す通り、初霜が白菊の花を「うづみはて」て、見えなくしているのではなく、白菊に初霜がおりた景氣を表現するためにこのように詠んだ、というのである。

## 2 三条西実枝から細川幽齋へ

こうした解釈は、三条西実枝から細川幽齋への古今伝受でも継承された。細川幽齋が実枝の講釈を聞書した『伝心抄』は宮内庁書陵部に伝わる。三条西実枝から古今伝受を受けた細川幽齋が、講釈終了後に講釈を聞書を整理して実枝に提出した後、実枝が加筆したものをさらに清書して実枝に提出した四冊で、各巻末に実枝の加証奥書がある。実枝から幽齋への古今伝受において相伝された『古今和歌集』の解釈を伝える聞書である。『伝心抄』はこの和歌の解釈を次のごとく伝える（引用は『古今和歌集注釈書集成 伝心抄』による）。

オラバヤオラン八、おらばオリコソハセメと云義ナリ。菊ヲモ霜ヲモトモニ愛シタル哥也。初霜ノ初ノ字ニカヲ入テ見ル哥也。初霜ナレバ、霜ヲモ見付又程ニ花ヤラン霜ヤラン分別セヌト也。

「トモニ」と、表現は少し変わっているが、「菊ヲモ霜ヲモトモニ愛シタル哥也」とする部分は『両度聞書』を継承している。実枝はさらに、「初霜ノ初ノ字ニカヲ入テ見ル哥也。初ノ霜ナレバ、霜ヲモ見付又程ニ花ヤラン霜ヤラン分別セヌト也」と付加えている。霜は霜でも「初」霜だからこそ、眼が慣れていないために「花ヤラン霜ヤラン分別セヌ」という。『両度聞書』の「うづみはてたる霜にはあらねど」という注釈に比べると、霜、とくに「初」霜であることを重視した解釈になっているように感じられる。

## 3 細川幽齋から智仁親王へ

それでは幽齋は、当時唯一の古今伝受継承者として、智仁親王に相

伝した古今伝受において、この和歌をどのように講釈したのであるうか。幽斎の講釈の様子は、幽斎の講釈を智仁親王が聞書した『古今和歌集聞書』三種（宮内庁書陵部蔵）により窺うことができる。これらはいずれも親王自筆であり、『当座聞書』・『中書本』・『清書本』として『図書寮典籍解題 続文学篇』（以下『続文学篇』と略す）に解説されている。さらに、『当座聞書』と一括された四冊の中には、『中書本』の一種とみなされる一冊がある。袋綴横本で、大きき・形態は『当座聞書』三冊と全く同様である。外題も『当座聞書』と同じく『古今和歌集聞書不完稿本』とあるが、やはり後人の筆である。このように形式は一致するが、その内容は『図書寮典籍解題 続文学篇』に「但一冊は稍稿を整理した中書と見られる重複もの」と指摘されているごとく、他の三冊とは異り、明らかに『当座聞書』を整理した、いわゆる「中書本」である。ただし、『中書本』として整理されているものとは内容が異なっている。「中書本」と紛わしいので、これを仮に「初稿本」としておく(3)。

「初稿本」と「中書本」との内容は類似しているが、形式や文章は「中書本」の方が整理されている。また「初稿本」で「猶可尋」とある事項が「中書本」でしばしば説明されていることから、まず「初稿本」が作られたと考えられる。そして「初稿本」を作った後、不明な点を幽斎に尋ねながら、「中書本」を作成したと推測される。

では、この二種はいつ頃出来たのであろうか。「初稿本」は講釈の記憶が鮮明なうちに、かなり急いで作成されたと考えられる。講釈が終了することに、『当座聞書』をたよりに講釈内容を整理したのではな

かろうか。『当座聞書』と同じ用紙に記され、しかも「日ノ分これまで也」と一回ごとに講釈の終了が欠かさず記されていることも、講釈終了ことに整理されたことを推測させる。その日のうちに復習をかねて「初稿本」を作成し、疑問点があればその都度幽斎に尋ねたのであろう。四種の聞書の該当部分を引用する。

『当座聞書』

折らば折りこそせめと也。菊霜をあいしたる也。詠哥同じ也

『初稿本』

折らば折りこそせめ也。菊霜をあいしたる也。詠哥大概と同じ

『中書本』

折らば折りこそ八せめ也。菊霜を愛したる哥也。初霜おもしろし

と也

『清書本』

折らば折りこそ八せめ也。菊霜を愛したる哥也。初霜おもしろし

と也

この和歌については、四種の聞書の内容がほとんど変わらない、いずれも「菊霜を愛したる哥也」という部分は東常縁以来の解釈が継承されているが、その他は「初霜おもしろしと也」と、初霜の風情を指摘するのみである。

これらの解釈が、中世歌学において最も權威ある、この和歌の解釈であった。

## 三 『百人一首』の注釈書

古今伝受の継承者は、『古今和歌集』ばかりではなく、『百人一首』も学んだ。『百人一首』は藤原定家が初心者のために選んだ書として、中世歌学において重視された。そして、古今伝受の継承者も注釈書を著している。次に、宗祇と細川幽斎の注釈書を検討したい。

## 1 宗祇抄

『宗祇抄』(4)は、次のごとく記す。

おらばやおらむとは重詞也。いづれもあらまじしこと也。惣の心は、しら菊の面白盛なるは類なふ覚るに、はつ霜のいたうふりたる朝などにうちながめば、一しほあはれと思ふよし也。

『両度聞書』では、ただ「菊をも霜をも愛たる心」とのみ記されていた内容が、「しら菊の面白盛なるは類なふ覚るに、はつ霜のいたうふりたる朝などにうちながめば、一しほあはれと思ふよし也」と、「面白盛」である白菊に、「はつ霜」が加わることで、「一しほあはれ」であると解説されている。『両度聞書』の「うづみはてたる霜にはあらねど景氣をいはんとてかようにしたてたる也」とある部分も、『宗祇抄』を参照すると理解しやすい。初霜がおりたことで白菊が霜と区別できなくなるのではなく、初霜が加わることで白菊の風情が「一しほあはれ」になったというのである。『古今和歌集』の詞書には「白菊の花をよめる」とあることから、この和歌が「白菊の花」の美しさを詠ん

だことは間違いである。その白菊の花が、「霜と紛れて折りにくくなつた」状態ではなく、初霜の白さが加わることで、白菊の花の美しさが一層増したと、『宗祇抄』は解釈している。

『百人一首』二九首目のこの和歌の出典は『古今和歌集』であるから、宗祇をはじめとする古今伝受継承者は、この和歌を同様に解釈していたと推察される。しかしながら、同じ和歌の注釈でありながら、『百人一首』の注釈書と『古今和歌集』の注釈書では、それぞれ異なる書き方をしている。あるいは初学者のための入門書とされていた『百人一首』の注釈と、歌学界最奥の秘伝である古今伝受における講釈という、聞き手の和歌・歌学に対する素養の違いにより、注釈の内容が相違しているのだろうか。

すでに十分に和歌・歌学を修め、優秀な門弟として古今伝受の継承者になった門弟に対しては、和歌・歌学に入門したばかりの初学者に對するような、詳しくわかりやすい説明は必要なかったためであろう。同じ和歌についての講釈内容の違いは、講釈を受ける側の素養の相違によると推察される。それゆえ『両度聞書』をはじめとする古今伝受における講釈聞書は、『百人一首』など他の作品における注釈を参照する事により、聞書の趣旨が理解しやすくなるであろう。

## 2 細川幽斎の注釈書

幽斎の『百人一首』講釈に基づく注釈書として荒木尚氏は、幽斎自筆の『百人一首注』(永青文庫蔵)と『百人一首抄』(彰考館蔵)を解

説・翻刻された(『百人一首注釈書叢刊』3 百人一首注・百人一首(幽斎抄)、和泉書院刊)。荒木氏は後者について、奥書から「本書は幽斎講談のテキストであり、幽斎の第四子(三男)妙庵幸隆に与えられたものの写しであることがわかる。」とされた。これらの注釈書の該当部分を、『伝心抄』および智仁親王の問書と比較してみよう。

『百人一首注』(永青文庫蔵)

おらばやおらんとは重詞也。いづれも在増事也。哥の心は白菊の面白盛なるは、たぐひなく覚るに、初霜のいたつふりたる朝など打ながむれば、花とも霜とも色のわかれぬ風情一人あはれに思へば、霜のをきまどはせるを心あてにおらんとはいへる也。菊をも霜をもならべて愛したる哥也。あながちにうづみはてたる霜にはあらねど、景氣をいはんとて如此したてたるなり。

(略)

おらばやおらむは重詞也。祇注に双て霜菊を愛したる也。心あてはあらまし事也。おらばうつろひたるをおらば也。乍去愛してえおらぬ心也。霜と思へば花、花と思へば霜映る駄也。

『百人一首抄』(彰考館蔵)

しら菊のはなをよめるとあり。さておらばやおらんとは重詞也。おらばおりこそせめと云義也。いづれもあらまし事也。菊をも霜をもともに愛したる哥也。初霜の初字に力を入れてみる哥也。初霜なれば霜をいまだ見ならはぬ間、花やらん、霜やらん分別せずと也。白菊のいまだうつろはぬほど、初霜のふりたる朝、打ながむれば、花とも霜とも色のわかれぬ風情一人おもしろきを見て、

霜のをきまどはずとも心あてにおらばおらん、といへる也。あながちにうづみはてたる霜にはあらねど、景氣をいはんとて如此したてたる也。菊を愛する心から、霜のをきまどはずともおらばおるべけれども、えおらぬ心あるべし。

いずれも「花とも霜とも色のわかれぬ風情一人あはれ」と、霜が加わり「花とも霜とも色のわかれぬ風情」が「二人あはれ」であるという。「初霜の置きまどはせる」ために、紛らわしくて折るのに躊躇するのではなく、風情が増したとしている。そして、永青文庫蔵本はさらに「おらばうつろひたるをおらば也」という。「霜菊を愛したる」ゆえに、折るのなら「うつろひたるをおらば也」というのは白菊に対する愛情であろう。

これまで検討してきたように、伝統歌学、古注釈における解釈は、講釈をする師弟によってその内容が相違している。初霜の白さが加わることで白菊の花の風情が一人増す、という解釈は共通しているが、その講釈の内容は注釈書ごとに異なっているのである。『百人一首古注抄』によると、『経厚抄』は、これまで見てきた宗祇の流れをくむ注釈書とは異なる表現をしている。最後に『経厚抄』を検討しておく。

心あてにとは心のをしあてにと也。おらばやと思ふうちに、はや菊と見定むる方あればおらんと治定する也。下三句の心、霜の置きまどはせばこそ暫其とはみへね、菊はまぎれぬ花なりと云心のあるべし。仮令法曹の法門に、見分、相分、自証分、証自証分

と云四分見あり。これに類して可思歟。

一瞥すると、他の注釈書とは異なる独自の注釈のごとくである。他の注釈書では表現技法の「重詞」と解釈していた「心あてにをらばやをらむ」について唯識を用いて「見分、相分、自証分、証自証分と云四分見」すなわち物の認識の仕方だと解釈し、「霜の置きまどはせばこそ暫其とはみへね、菊はまぎれぬ花なりと云心のあるべし」という。こつした部分だけを見ると、他の注釈書とは異なる独自の注釈のごとくである。しかしながら、これまで検討してきた注釈書を参照すると、いずれも霜がおりることによって風情を増した白菊の花を詠んだ和歌だと解釈をしていることがわかる。そしてこの解釈は『古今和歌集』の詞書にも合致する。古注釈を検討する時は、古注釈が著された背景を考慮に入れて、注釈書の間で相違する部分と共通する部分とを区別して検討することが必要であろう。

- (1) 和歌の引用は新編国歌大観による
- (2) 片桐洋一氏は『古今和歌集全評釈』（平成十年 講談社）の要旨で「白菊の白さは、霜と区別がつかないほどで、折る場合にも、あて推量で折るしかないほどだといっているのである」と、白菊の白さに焦点をあてているが、「初霜の置き惑はせる」の語釈では「略（見る者を惑わせる）」とする。「おきまどはせる」の部分は「見る者を惑わせる」と解釈するのが、現代では標準になっているといえよう。
- (3) 智仁親王による古今伝受の講釈聞書については「細川幽齋の古今伝受」(『国語と国文学』昭五五・八)で検討した。
- (4) 以下、『百人一首』の注釈書の引用は『百人一首古注抄』（島津忠夫・上條彰次編、和泉書院）による。